
ずれた男の異世界観察

響竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずれた男の異世界観察

【Nコード】

N7826T

【作者名】

響竜

【あらすじ】

どこかずれたメタル系モンスターと魔術好きの男の異世界観察。

ハッピーエンドもバッドエンドもありません。

前回の「メタルボディが世界を渡る」をいろいろと書き直した話です。

旅の扉と異世界（前書き）

いろいろと展開やら設定を書き直しましたが大まかな所は同じです。

旅の扉と異世界

とある街中のでの一角

「あゝやっぱりメタル系って最高だ。」

今流行りの3DSの画面をつつき、腕に「とある魔術の禁書目録」を入れた袋を持ち歩いている若い男が歩いていた。

あゝあ、漫画やラノベにありがちな、いきなり異世界へ転移とかないのかね？日常は大事だっていうけどだから非日常に憧れるわゝ

只今妄想中なこの男、ドラクエモンスターズのゲームをやっているのだがモンスターはメタル系スライムだけを仲間になっているのだ。メタル系は呪文や特技などの攻撃をほぼ受け付けない特性と攻撃力とHP以外のステータスはとてつもなく高いという使う人が少ないクセの強いモンスターなのだがこの男はメタル系に対する愛が凄まじく、一番の弱点である低いHPと攻撃力をアイテムや配合でかなりの時間を費やし克服し、さらにすべてのメタル系スライムを集め特技や呪文をバランスよく覚えさせ最強のメタル系スライムチームを作ってしまった。はつきり言ってそんな面倒なことしたのはこの男位であろう。

ちなみに「と禁」は出ている魔術が面白いので、買ってきた所だ。個人的には主人公の上条さんより敵のフィアンマの方が好きらしい。

「さゝてそろそろ昼だから何時ものファミレスでも行こうかな…ん？」

気づくと薄暗い路地裏に入っていたようだ。余り長居したくはない

所なので早く出ようとして出ようとしたが

「なんだこれ？」

この場所になぜか不自然に置かれている年季のはいったトランクがあった。

怪しい、怪しいぞ。うゝむ…どうしようか

なぜか無視できない怪しいトランク

とりあえず拾ってみようと取っ手に触れた瞬間

…プログラム名「旅の扉」発動…

「へっ？」

突然、トランクから男のような女のような声が聞こえると同時に、青色と水色の線が渦巻くドラクエでお馴染みの旅の扉が地面に開いた。

はて？なんで旅の扉が現実世界に？つかこれ本当に旅の扉？

そんなことを考えている内に旅の扉にトランクといっしょに落ちてゆき

「あゝれ…」

緊張感のない男の声と姿が消えると共に旅の扉も外側から縮まってゆき完全に消えた。

パカッ

ドサッ！

「うゝん…なんだ？旅の扉を潜ったのは覚えてるんだが…」

何がなんだかわからない

とりあえず辺りを見回すとどこかの応接間らしくテーブルと、向かい合うようにソファがある。

だが床には紙が散らばっているのと奥にある天井まで積まれた大量紙の山が資料室を思わせた。

「これは一体…？」

明らかにさっきまでいた街中の路地裏ではない。
思わず疑問が声にでると

「ふむ、それはこちらでも聞きたいね」

それに対して誰かが返事をした。

旅の扉と異世界（後書き）

展開を少し早めました。

情報屋の社長さん（前書き）

まだプロローグみたいなものです。

情報屋の社長さん

「えっ？」

誰も居ない部屋から返事が返ってきたので少々驚き、見回すがやはりいない。

はて？と首をかしげていると

「まあ、こんな状態じゃわからないね。とりあえずお互い聞きたいのは同じだと思うからソファーに座って話そうじゃないか」

今度は声の居所が分かったのでそちらを向くと、どうやらあの紙の山の中かららしい。

疑問符を頭の上に出しながらも、お言葉に甘えてソファーに腰掛け
た。

「さて…こんな対応ですまないがまずは自己紹介といこうか。僕はここで情報屋“W・D”の社長をやっている者だ。ま、情報以外にもいろいろと集めているけどね」

「あ、俺の名前は白金黒しろがねくろです。えーっとここに来たのは…」

「…なるほど、そのトランクに触れてこの場所に」

「ふざけた話ですけど…それしか言えないので…」

とりあえず黒はさっきの出来事を説明したが普通ならこんな話は妄

想の類いだと馬鹿にされるものだ。しかし、この社長さんはそんな態度をせず黒の話をちゃんと聞いていた。

どうやらこの社長さんもこういった非常識な事に触れているらしい

「ふむ、ではそのトランクは？」

「あつ、そういえば」

そういえば一緒に吸い込まれたはずなのに見当たらない。

やばい、アレがもし俺とは別の場所に行っていたらなんにもできない！

黒が最悪の事態に頭を悩ませていると

コンコン

「社長？入りますよ？」

ドアの向こうから女の子の声がしてドアが開き、誰かが入ってきた。

「社長、いきなり天井からトランクが落ちてきたんですけど…あれ！？お客さんですか！？」

見覚えのあるトランクを重そうに持ってきたのは一人の少女だった。格好は頭に黒のリボンをつけ黒白でスカートがある服、胸元には赤色のリボンをつけており、容姿は肩までで切つてあるショートカットの銀髪と赤色の目、可愛い顔に眼鏡を掛けている。

「…どうも」

とりあえずこの少女はこの関係者らしいので挨拶しておく。

「わわっ！す、すみません！お客さんが来たこと気付かなくて！」
「いや、俺はお客では…」

「すぐにお茶の用意しますね！しばらく待ってください！」

そう言つて慌ただしくドアを開けていった。直後、大きな音と「痛っ！」という言葉が聞こえたので多分転んだんだろう。

「やれやれ…アーミル君にはもう少し落ち着いた欲しいね」

社長が少し呆れたように言う。

もしかしていつもあんな感じなのかねえ？まあ、いいや。それより…

アーミルというらしい少女が持ってきてくれたトランクを持ってみる。やっぱりみたところは普通のトランクだが中身はどうなんだ？

なにはともあれ開けてみようと思つて机に置いて持ち手の所の鍵を外して開こうとした。

だが

ウィーン…

「ん？おわっ！？」

パソコンの起動音みたいなのがしたと思つといきなりパカッと開き、開いた片方の面には画面がついておりそこにはこんなことが表示されていた。

—プログラム名【旅の扉】…

使用者【白金・黒】…

機能

【言語翻訳】

【異世界転移（現在チャージ中…）】

【サーチ（半径5km）】

【ステータス表示（使用者名必須）】

【無限収納】

【オールゲームプレイ】

【分析】
スキャン

【現在機能がありません…】

【現在機能がありません…】

機能3つを新たに入力してください…

「えーっと…社長さん。これなんだと思います？」

自分ではどう対処したらいいかわからないので社長さんの方に向けてながら聞く。

「ふむ、もしかしたらあの“旅の扉”かもしれない」

「旅の扉？」

「僕もよくは知らないんだが…誰が、なんの目的で作ったかは知らないが、ときたまどこかに現れては最初に持った人に何かしらの能

力を与えて異世界へ飛ばす、人によつては迷惑なものだと聞いたよ。
そして持ち主が死んだりしたら勝手に旅するらしい」

「それで今回は俺が飛ばされたって訳ですか…ん？能力？」

社長さんの話なら俺にも何かしらの能力が付いているはずだ
このステータス表示って所を開けば解るかもしれない

「よし、タッチだ！うおおおお！」

無意味に熱いテンションだが普通に画面にタッチしただけだ。

すると画面が切り替わってゲームのステータス欄っぽいのがでた。

—使用者名【白金 黒】

種族【メタルマスター】

LV：1

HP【50】

MP【999】

こつげき力【100】

ぼうぎょ【999】

すばやさ【9999】

かしこさ【999】

EXP:0

NEKT:あと 5

特性

メタルボディ:あらゆる特技や呪文を受け付けない

LV+∞:レベルの上限がない

にげあし:必ず逃げられる

分裂:自分の身体からメタル系モンスターを作れる

変形:形を自在に変えられる。ただし、中身までは変えられない

覚えてる特技

ゲーム「DQM」シリーズの専用技以外全て

魔術書10万3千冊の知識・応用

?????【現在使えません】――

「なあにこれえ？」

黒が自分のステータスをみてでた言葉はそれだった。

情報屋の社長さん（後書き）

？の部分なんにしようか迷ってますww

現状の把握（前書き）

ちよつと展開が雑かも

現状の把握

コポコポ…

カチャッ

「どうぞ、紅茶です」

「あ、こりゃどうも」

アーミルが煎れてくれた紅茶を口に持ってゆき一口飲む。

紅茶の香りが失われておらず、甘さもくどくない程度で美味い。

ただ気になるのは入れ物がお洒落なカップではなく日本の湯飲みという所だが。

「美味しい紅茶ですね」

一応感想を言っておく。最低限のマナーは守らないとね

「そつ、そうですか。良かった」

ほつとした様子のアーミルさん。しかしこの容姿、某弾幕ゲームの「そーなのかー」と言う人に似ているが関係あるのかね？ま、別にいいけど

そんな事を考えながらトランクの画面を眺める。

ステータス画面がドラクエ型式なのは別にいいが、通常ならステータスの上限は999までのだがLV・1なのにHPとこうげき力を除いた他の数値は既にMAX、すばやさに至っては文字通り桁が違う。ただHPは会心の一撃を食らったら即アウトな値。

まさにメタル系のステータスじゃないか！ということが分かった。
自分のメタルマスターという種族がよくわからないが…

あと魔術書10万3千冊の知識だが、漠然と頭の中に何かがあるのは分かるがなんせ術と魔術書の名前を知らないのではぼ使えない。
原作で出てきた術や「歩く教会」などの霊装もほんのわずくらいしか覚えていない。

ちなみにドラクエの知識はばっちり覚えているけどね。

そして一番肝心な異世界転移の機能だが社長曰く…

「基本的に異世界への転移はランダムだね。僕的能力もそれは変わらないけどここには戻ってこれるみたいだよ」

つまり自分の世界に戻るには無数にある世界にギャンブルで跳ばないと帰れないらしい。つまりほぼ零の確率

まあ、黒は別に未練がある訳ではないが

「僕はその能力を使って様々な世界を見てきたよ。そして物語を記録しているんだ。まあ、それは趣味みたいなものだけだね」

「へえ…」

面白そうだなそれ

「ところでアーミルさんは助手かなにか？」

「えっ！？えつと私は…」

急にしもどもどろになるアーミル。

「いや彼女は君と同じようにここへいきなり現れたんだ。ただ、君と違って…何処からどうやって来たのかそして…」

社長さんに続けるように困った顔でアーミルが言う

「自分が誰かがわからないんです…名前と能力以外なにも…」

「…そつか」

「そ、そんなに気にしないでください！今は社長の仕事とか手伝っているので寂しくなんかありませんから！」

重い雰囲気を変えようと気丈に振る舞うアーミルだが少し様子が痛々しかった。

ともあれこれ以上この話はしない方がいいな

話題を変えようと社長さんに話かける

「なあ、社長さん」

「ん？なんだい？」

とりあえず今後の事は決まった。

「俺もここで働かせてくれないか？」

現状の把握（後書き）

ハーレムか…悩むな

キャラ設定っていりますか？一人でもいれば載せるつもりです

魔法の世界へ（前書き）

前作の面影がほぼありません。自分でもこんなに変わるなんて思わなかった…

感想とアイディアを！

魔法の世界へ

「あつ、黒さん。その資料とってください」

「ん？これか？」

俺が社長さんに雇ってくれと頼んで数日。

「いいよ」とあっさり決めてくれたのにも驚いたが社員が居ないの
でいきなり副社長というのだからアバウトだ。

ただいきなり異世界へはチャージができてないのでここ数日は資料
の整理などの仕事をやっている。

そして世界についてだがどうやら社長さんとアーミル以外は人がい
ないという。外にでてみたが周りは川やら森なんかがある自然溢れ
る風景だった。

「社長、資料室の整理終わりましたよ」

とりあえず一通り終わったので部屋へ行き社長に報告する。

「ご苦労黒くん、アーミル君。もう仕事は無いから後は好きにして
構わないよ」

相変わらず声だけの社長。本当にいるのかちょっと疑問になりだし
た。

「あ、じゃあ私紅茶入れてきますね。ミルクはいりますか？」

「では頼むよ」

「俺も」

アーミルの入れるミルクティーはとても美味しいので俺も社長も気に入ってる。

たまにみせるドジっ子属性以外は大丈夫なんだよねこの子

「黒くん、仕事には慣れたかい？」

「慣れたもなにも…まだ資料の整理やアーミルのドジの後始末ぐらいしかやってないんですけど」

「ふむ、それもそうだね」

そもそも仕事と呼べるかも微妙だが。
と考えてると

…ピピッ…異世界転移が可能になりました…行きはランダムとなりますのでお気をつけください…往復一回分となります…

唐突にソファアに置いていたトランク、旅の扉から中性的な声が響いた。

「どうやら行けるようになったようだね。では黒くん、君に初めての仕事を頼むよ」

いつもの少し飄々とした声に真剣味を帯びさせて社長はまともな仕事を与えてきた。

「はいよ、わかりました。でもその前に…」

「ふふふ、今日はいつもより自信がありますよ」

アーミルがいい笑顔で持ってきたミルクティーを堪能してからにしよう。

「さて、行くぞ。覚悟はいいかアーミル」

「うっ、楽しさ半分不安半分ですね…」

アーミルのミルクティーを味わった後、外に出て転移の準備をする。準備と言っても画面で転移を声だけで発動するように設定しただけだが。

あとアーミルは社長が助手として連れて行ってくれと言われたので一緒に来ることになったが、どうやら異世界へ行くのは初めてだそうだ。まあ、能力を持っているらしいのでいざとなったら逃げられるということだ。

「ま、ドンパチしに行くわけではないけど何が起こるか分からないからな。よし！プログラム名【旅の扉】、異世界転移発動」

ウィーン…

直後、足元にここに来た時と同じように青と水色の渦が現れる。ただ違うのは周りに光の壁が覆うようにしてしてゆっくりと包みこん

できた所だ。

案内人でもいれぱツ。サクロニクルのワンシーンだな

黒とアーミルがいる光の柱は徐々に小さくなってゆき

フツ

きれいに消えていった。

――

一瞬沈んだような感覚のあと再び地面に足をつけた感覚が戻る。

どうやら着いたみたいだな…

黒が前を見る。すると

「誰だ貴様！？」

「…！？」

…はて？この状況は何なんだ？

身体中ボロボロで倒れている金髪の少女と、それを踏みつけて手
向けている白衣をきた中年位の痩せた男いうどう見ても普通ではな
い様子が眼下にあった。

さて、どうしよう…ん？あの少女どこかで見たことあるような…

「おい！何者だと聞いているんだ！答える！」

と、状況を考えると男が敵意むきだしで聞いてきた。

「ああ、すまない。ちょっと考えていて…一つ、こっちの質問に答えてくれないか？そうすればこっちも答えるから」

とりあえず確認したいことがあるので話ができそうな男に聞いてみる。

「……いいだろう。何が聞きたいんだ？」

おっ、警戒はしているが話はできそうだな

「どうも。では聞きたいんだが…」

まずはこの質問で反応をみるか。

「あんたら、何だ？」

魔法の世界へ（後書き）

主人公のメタルマスターという設定について

メタルマスター

？系

メタル系モンスターすべての元になる金属質の身体を持った種族。
完全な金属では無いためかなりの柔軟性と応用ができる。

特性

メタルボディ：自分に害をなす術や特殊な技を問答無用でかきけす。
物理的な力は打ち消せないが自身の硬さがあるのでほぼゼロ。

分裂：身体の一部をを元にしてメタル系モンスターや武器を作る
ことができる。ただし、強さは黒のステータスに比例する。

あれ？負ける要素が皆無だ

対峙する異形（前書き）

今回はかなりの俺ルールがあります。

ちよつと展開遅い？

対峙する異形

「！…どうゆう意味だ？」

質問に少し驚く男。

やっぱりそうか今の質問じゃ自分達が普通の存在ではないってことを知ってるようなものだからな。

「な」に、名前を聞きたいだけだ。真祖の吸血鬼のな？」

推測が正しければこの少女は漫画のネギまに出てくるエヴァンジェリン？ だったと思う。そしてこの状況からしてコイツに復讐しに来て返り討ちにされたってところかな？

「なぜそれを！？…いや、お前が誰かなどいい…」

男は静かに呟きながら下の少女から足を退けてあろうことが蹴り飛ばしてきた。

「がぐっ…！」

「あっ！」

それに気を取られている内に男はこちらへ手を向け

「一緒に消してやろう！ もえるせかい」

赤い光が眼下を覆った。

「白衣の男 サイド」

アッハッハッ！呆気ない奴等だったな！

みんなの仇だとか喚いて後ろから襲いかかってきた実験台の小娘を
適当に痛めつけ、トドメの上級魔法で消し去ろうとした時にいきな
り現れた光の柱から出てきやがったのは驚いた。

まさか研究のことを嗅ぎ付けた魔法使いどもかと思ったが男も少女
も魔力を一切感じなかったので違うようだった。

だが男は何故か俺と、この小娘の正体を知ってやがった！

この時点でこいつを殺すのが決定した。まあ、誰であろうが殺せる
し殺すつもりだったがな。そう何体も真祖の吸血鬼がいたら俺もや
りにくくなる

ともあれ魔力もない、あつても魔法を使えずボロボロの小娘に俺の
上級魔法が耐えられるはずもない。今だ燃え上がる炎の中で灰になっ
てるはずだ。

「良かったな小娘！死ねたついでに思わぬ道連れが出来てよお！ヒ
ヤハハハ「ヒュンッ！」ハアッ……！？」

と

笑っていた時、何かが炎の中から飛んできて俺の右腕を切ってい
きやがった。

「なっ！？」

切り取られた腕は持ち前の再生能力があればすぐに戻るので一瞥だけして再び目の前の炎を見る。

「いきなり失礼な対応だな。まあいい、そっちがその気ならこっちもやらせてもらう」

するとさっきの男が焼け跡さえなく小娘二人の前に立っていた。何故か片腕だけになって

く黒 サイドく

いきなり男が上級っぽい魔法を放ってきたので慌ててエヴァとアミルの前に立つ。

今の俺にはメタルボディという特殊な技や魔法とかの攻撃を一切受け付けない特性を持っているので試してみたがどうやら成功したようだ。

爆炎が俺に当たって掻き消えて後ろに届かない。なんというチートさて、どうやら向こうさんは俺等がやられたと思ってバカ笑いしてやがるからその隙に…

さっそくもう一つの特性を試そうと思えば腕をもぎとって自分の中にあるMP?であろう不思議な感じのする流れと形のイメージを思い浮かべる。
すると…

ドロツ…グググッ

取った腕が鈍色の液体状になり次には膨張すると同時に徐々に形をなしてゆき

「ふむ…はじめまして、アナタがマスターでよろしいので？」

最後にはドラクエでお馴染みのメタル系モンスター、金で出来た円錐形を倒したような体をもつゴールデンスライムが出来上がった。

「な…なんだそれは…!？」

後ろからエヴァがそれを見て驚いているようだ。

そりゃそうだろうね

いきなり現れた男が生身で炎を受け止めたうえに自分の腕もぎ取って見たことない生き物作ったんだから。

ま、俺もはじめてやって驚いているんだけど

マジかよ！スゲー！本物だ！

…おつと感動に浸るのは後にして

「まあ、そうだ。さっそくだがお前には活躍して欲しい、今から俺がイメージする形に変形できるか？」

「もちろん、私はマスターの一部でもあるのだから容易い事です」

そう言ったと同時にゴールデンスライム（以下、ゴル）は手裏剣のように薄くなって鋭い刃を周りに生やした。

そしてそのまま笑い声のする方に向かって両手で掴みぶん投げる。

笑い声が途中で止まったので多分ヒットしたと思う。

片腕で一振りして炎を消すところらを信じられないような目で見ると

自分と同じように片腕の男がいた。

「貴様……！一体なにを……いや、なぜ魔力もないのにダメージを受けてない！？」

「いや、こつちもいろいろと常識離れしているからな。ま、とりあえず……」

男の質問を無視しつつ残った片腕を上に向ける。

「……？何を……して……っ！？」

後ろから迫るゴールデンカッター（今命名）を今度はギリギリでよける男。

そしてそのまま手元にゴルが収まる。

ふむ、さすがに二回目は通用しないか、まあ身体能力が半端ない吸血鬼だしね

「ちつ、小賢しいマネしやがって……だがそんなものじゃ真祖の吸血鬼である俺は殺せんぞ！」

そう言い、落ちた自分の腕を拾い断面に合わせるとわずか数秒でくつつけた。

まっ、それは俺も分かっている
なら……

「ゴル」

「了解」

メキメキ

ゴルの形を更に変える。さっきとは違い、より武器らしくより意味のある形に
そうして出来たのは

「十字架…？」

「そうだ吸血鬼のおっさん。なかなか洒落てるだろう」

金色の十字架であった。

下に長く突き出た先端は鋭く、心臓に打ち込む杭になっており、交差した一つの直線は刃になってる。更に頭の中の魔術書にある吸血鬼殺しと不死殺しの術式を刻んでいる凶悪な十字架だ。

さて…一体いくつ耐えられるか？真祖の吸血鬼

対峙する異形（後書き）

実は武器が十字架つてのをやってみたかったので書きました。

何故か十字架つて聞くとコロコロでやってたコロツケのフオンドボ
ーを思い出してしまう。

あれ棺桶だったはずなのに

吸血鬼は悲願を叶える（前書き）

どうぞ

吸血鬼は悲願を叶える

ズバッ！

「かつ…！くそがつ！」

すさまじい勢いで飛んできた金色の十字架に完全には反応出来ず横腹を切られ、白衣の男はよろめく。

そしていつもならすぐに回復するはずのダメージが異様に遅いことに驚きと怒りが混ざった表情をしていた。

「なぜだ…？魔力を感じられないのになぜ俺の障壁を砕ける？なぜ傷の直りが遅い？そして…」

先ほど飛んできた十字架が投げた張本人、目の前の得体の知れない黒のバンダナを巻いた青年、白金黒の手元に戻っていく。

「何なんだ…お前は！？」

「まあ…こつちもいろいろと常識離れてるからな」

あくまで淡々とした態度で近づいてくる黒に男は怒りの感情が一気に湧く。

「ふざけるな！俺は真祖の吸血鬼だぞ！魔力も肉体も人より上位の存在だ！それを…」

そこで男は一旦言葉を区切り腕を白金へ向ける。

「忘れるなアア！ヴラ・ラ「マトホーン」…？…！？」

男は自身が持つ最上級魔法を唱えようとしたが途中で何故か止まった。いや、止められた。白金が呟いた呪文によって

「ふむ、どうやら名前を思い浮かべればやり方も浮かぶらしいな」

どうやった！？口が開かないぞ！？くそつ、だが魔法を使えんでもこの身体能力ならば！

すぐに考えを切り替えると男は体重と魔力を乗せた一撃で白金に殴りかかる。が

ヒョイツ、ボンツ！

「イイ！？」

先ほど襲ってきたエヴァンジェリンをやったようにカウンターで腹に蹴りを入れられた。ただ、違うのはこちらのスピードに加えてむこうが強烈な一撃したおかげで下半身が吹っ飛んでしまったことだ。

ベシヤツ、つと地面に上半身だけになって落ちる男。

なぜ？どうして？この俺を？

もはや怒りなど忘れて頭の中には疑問しか浮かばない。さすがにこれほどのダメージを治すのには時間がかかるので今頭を狙われたら…

「さて、殺すのは好きではないが殺そうとした奴をほっとく訳にはいかないからな…真祖の吸血鬼とはいえど、さすがに頭を潰したら死ぬだろ？」

そう言うと黒は男の頭の上に武器と化した十字架を持っていき振り下ろそうとする。

「……!!……!!」

男は必死になにか言おうとしているが、まだ呪文のせいで口が開かず残念ながら伝わらない。もっとも、開いたところで状況がかわることはないだろうが。

「待つて！」

だがそこで後ろから止めの声がして足が止められる。

黒が顔だけ向けるとエヴァンジェリンが力強い目をして男を睨み付けながら近づいてきた。

「そいつのとどめは……私にやらして……！」

「ああ、分かった。」

要求にあっさりと答え、十字架をどけて黒は場所を譲る。そして今度はエヴァンジェリンが男の前に立ち見下ろす。

「お前から謝罪の言葉を言わせられなかったのは残念だけど……」

絶望的な顔をして少女の言葉を聞く男。さっきまでとは逆の状況にされているのも効いているのだろう。

少女は細くも人を簡単に壊せる腕を振り上げ……

「せめて……死んだ人達の気持ちを味わえ！」

その腕を振り下ろした

男は詠唱も悲鳴もあげれず細かい肉片となるまで

何度も

何度も

振り下ろされた

先程の場所より少し離れた所、男が使っていた古びた城の前で火の光りと三人がいた。

「これが…最後の洋紙」

エヴァは手に持っていた洋紙を火の中に入れる。火の中にいれられた洋紙はあっという間に小さくなってゆき灰になる。

「よかったのか？もしかしたらいつか元に戻る方法も解かったかもしれないのに」

「ううん…アレがあつたらまた私みたいな化け物になっちゃう人もいるかもしれないから…だからこれで良かったんです」

男を殺した後、研究に使っていたと思われる城に入り真祖の吸血鬼に関するあらゆる物を燃やしのだ。最初はエヴァも自分が元に戻る方法を探していたが吸血鬼にする方法しか書かれていなかったためあきらめた。

「ありがとうございます。燃やすの一緒に手伝ってくれて、アイツに痛手を負わせてくれて。えっと…」

「副社長と呼んでくれ、呼びにくかったら……プラチナでいい。情報屋をやっている」

「え、ええっと私はアーミルです。副社長黒さんの助手をやっています」

「わ、私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルです。…知ってと思いますけど真祖の吸血鬼です…」

最後の部分は弱々しく言うエヴァ。やはりまだ自分が人外になったことに抵抗があるのだろう。

「そつみたいだな」

「そー…なんですかー」

「…あの…私からも一つ聞いてもいいですか？」

「どうぞ」

「貴方達は…人なんですか？」

不安と希望を半々にしたような表情で質問する。エヴァにとっては一番知りたいことだろう。さっきの光景を見て自分と同じ人外なら助けてくれた理由になるが人なら他に自分を利用しに来たのか分からないからだ。

そしてその質問に少し黒とアーミルは唸った後

「わからん。まあ、ただの存在ではないと自覚している」

「私は一応妖怪らしいです」

二人とも予想外な答えを返してきた。しかもアーミルの方が妖怪と
いうのは完全に予想してなかった。

さっきの炎も

「ヒヤアツ!？」とか「眼鏡も熱い!」とか言っていただけなのだから。

「アーミル妖怪だったんだ…まあ、あんまり驚かないけどね」

「あれっ、言ってなかったですか?というよりあまり驚かないよう
ですね?」

予想外にだったのはどうやら黒も同じだったようだ。だが見た目が
知ってる妖怪と瓜二つの上に能力を持っていると聞いていたからだ。

「いやな、お前に似た奴が妖怪だったからな。まあ、ドジっ子属性
はなかったと思うしアーミルとは真逆の性格だな」

「む!その言い方じゃ私がドジって言っているようじゃないですか
!ちよつと不器用なだけです!」

アーミルは頬を膨らましプンスカと反論するが、あまり修正されて
ない。

「あ、あの〜」

しばらくそんなやりとりを置いてけぼりになっていたエヴァは話を戻そうとする。

「おっとお、悪い悪い話がずれたな。まあ、これだけは言っておくよ。別に自分は人だろうが、人外だろうが、マクダウェル」一旦そこで止めてエヴァの目を見ながら続ける。

「気にしないさ。俺にとっては人が吸血鬼なんかはたいした問題にならん。結局は敵かどうかが一番の問題だ」

あまりにもざっくりとした考え。けど吸血鬼になってから今まで魔女狩りなどで自分を殺そうとした人間よりかはるかに優しく感じてしまった。

「安心して下さい」

少し驚いていると頭に手を乗せられなでられた。横を見るとアミルが片手を伸ばして頭をなでている。

「泣きそうだったら頭をなでてあげたほうがいいって前誰かが言っていたので…迷惑ですか？」

「うっん…ありがとう」

なで続けるアミルの手が心地いい。久しぶりに感じた優しさである。

「…うっ、うっう…」

気づけば涙が少しづつ零れる。だが悲しいものではない。

「マクダウエル、一回思いっきり泣いたほうがすっきりするぞ」

それがきつかけだったのだろう

「うつ…うつああああん！お父さん…お母さん…みんな…私…グ
スツ…仇とったよ…うああああ…」

「わ、わわ」

アーミルに抱き着きながら盛大に泣くエヴァ。その格好は真祖の吸血鬼などという強者ではなくただの幼い少女としか思えない。

「…化け物ねえ。俺もたいがい化け物だけだな」

横目でそれを見ると自嘲気味な笑みを浮かべながら白金…いや、プラチナ兼、副社長は綺麗な夜空を見上げながら呟いた。

吸血鬼は悲願を叶える（後書き）

ちて、どこまで書いて

社長とアーミルの日常（前書き）

番外編みたいなものです。

社長とアーミルの日常

ある1日

チュンチュン…チュンチュン…

「…うゝん朝ですか…」

ベッドとクローゼット、そして黒のリボンが何個か机に置いているだけの簡素な部屋

その部屋に日差しが差し込んできて朝を知らせるとベッドの毛布をのけて一人の少女が起き上がった。

「むにゃ…よし、朝ご飯採りに行く」

若干眠気が残っているままベッドから降りる少女は、頭に黒のリボンをつけた銀色のショートヘヤーを日光に煌めかせながらドアを開けて外に出た。

「えいやっ！」

ピョンッ

外に出ると建物の周りを覆う森の中に入り、朝ご飯を少女は採ろうと奮闘していた。

「むー、すばしっこいですね」

さつきから彼女が捕まえようとしているのは通常の兎の10倍はあり肉は濃厚なチーズの味と香りがある《チーズラビット》。兎らしく、見た目よりも素早い。

「じゃあ…能力使いますよ？兎さん」

じれったくなつた少女はそう呟くと真剣な顔つきになり足を止める。それを見たチーズラビットは追いかけるのを諦めたか？とまっていると…

ピカッ！

次の瞬間閃光がしたと思ったら目の前には蹴りを繰り出そうとしている銀髪の少女がいた。

ドグウッ！

「社長さん。おはようございます」

少女が社長室と書かれたドアを開けるといつも通り、奥に天井まで積まれた紙の中から姿の见えない社長が返事をしてきた。

「おはようアーミルくん。今日は天気もいいからアーミルくんも調子が良さそうだね」

「はい！それじゃあ社長さん。今日は何をすればいいですか？」

楽しそうな表情で社長からの仕事の依頼を待つ。もともとアーミルの仕事だいたい書類や本の整理、そして給仕などの雑用なので重要ではないが。

「そうだね…じゃあそこにある黒の本を資料室に戻した後お茶を入れてくれないかい？アーミルさんの煎れてくれた紅茶は美味しいから仕事もはかどるんだ」

「わかりました！美味しい紅茶を待っていて下さい！」

さっそく黒の本を軽く20冊程持つ

一冊一冊が辞典のような分厚さなのでかなりの重量なのだがそんなことを気にしない表情で歩く。

「ああ、アーミルくん。もうひとつ」

「？何ですか？」

「右のほっぺに血が付いているよ」

言われた通りほっぺを触ると確かに血が付いていた。

「あつ、ほんとだ。どうも」

そして手についた血をペロツと舐めると本を運んで行った。

残った姿の見えない社長はしばらくペンを走らせていたが

「アーミルくんって…もしかしてあの娘と関係あるのかな？闇を纏ったあの妖怪の娘に似ているし。…まっ、今はいいか」

そんなことを呟やいて仕事に戻った。

社長とアーミルの日常（後書き）

たまに書いて行こうと思います。

紅茶とウーロン茶と緑茶はみんな同じ茶葉でできてるって驚き。(前書き)

久しぶりに更新。

今回の話で主人公の好みが分かれるかもしれません。

紅茶とウーロン茶と緑茶はみんな同じ茶葉でできてるって驚き。

「ん…むう……?」

ある部屋の一室、真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリンは簡素なベツドの上で意識をぼんやりと覚ました。

私は確か…そうだ…あの男にトドメをさして…それから…

エヴァはそこまで考え、とりあえず昨日の情報屋がいるか確認するため意識と視界をクリアにする。すると、

「やあ、目が覚めたかい金髪のお嬢ちゃん」

すぐ目の前につぶらな瞳をした丸い黄金色の物体が浮かんでいた。

「……キヤアアアア!？」

ガンッ!

「…まったく、いきなり殴るとは無礼じゃないのかい?」

「い、痛い……うう、ごめんなさい」

よく見れば昨日自分を結果的には助けてくれた人(?)だったのだが、驚いてついエヴァは力いっぱい殴ってしまった。まあ、予想外

に硬く、逆に手を痛めてしまったが。

「え、えーと？アナタは確か昨日のプラチナさんの…」

とりあえず敵ではないと、ここが昨日見つけた城の中だとゆうのがわかったのでエヴァは昨日、情報屋と言ってた男と銀髪の少女のことを聞いてみる。

「ふむ、マスターのことかね？なんでも用があつて近くの町まで行ってくるそうだ。そして私は君が起きるまでの警備みたいなものを任せられたのさ。ちなみに私の名はゴルだ」

「そう…あつ、そういえばゴルさん」

「気安く呼ぶなアー！」

「えええー！？」

ここでひとつ、ずれた性格の主から作られたゴルがっこう扱いづらいことを学んだエヴァだった。

＼ side OUT ＼

城から数キロ離れた場所にある町中

「むっ？」

「ん？どうしたんですか副社長？」

「いや、なんか殴られたような気が…まあ、気のせいかな」

「ふん。そんなことより副社長、早く茶葉を売っている店探ししょうよ！あの城には置いてないなんて許せません」

はいはい、とやる気無さげにアーミルに返事をしながら出店を歩く黒。

今日黒とアーミルが町に来たのは単に紅茶の茶葉を買いに来ただけではない。

ちよくちよく店のおっちゃんやおばちゃんなどから情報を集めて現在の時代や場所の確認も兼ねておりその結果、ここはイギリスの田舎町ということと、町のあらゆる所に汚物が放置されている所と建物の造りからみて原作から約600年程前の時代だろうと把握した。ネギまねえ…。あんまし知らないけど、たしか原作の20年位前に魔法世界で大戦があったんだっけ？完全なる世界とやらの組織が裏で糸を引いてて。

黒は魔法や魔術といった概念がある漫画が好きで、その中にもネギまはあったのだがそこまで思い入れはなく、原作知識なんてほぼ皆無だった。

まあ、だからといって原作を変えようなんてこれっぽっちも思っていないし、漫画では主人公のネギとその周りの人達にスポットが当てられたが、この世界に来た以上、別に特別な存在ではないので助けようとも思っていない。

もともと自身が危ない目に遭うというなら何らかの行動は起こすが。

まあ、世界の観察つつう仕事があるから完全に無視はできないだろうが…調整が難しいもんだねえ…

「うう…何処にも紅茶の茶葉が売ってません」

「そういえば紅茶がイギリスに輸入して来たのって、1600年位だったわけ？それに当時は高級品だったらしいが…まあ、諦める」

シヨボン、と頭の黒のリボンごと何故かうなだれるアーミルをなだめながら城に戻る道を歩く黒達。

これからについていると考えた結果、魔法が使われる世界つまり魔法世界に行った方が何かしら大きな事件が起こるのではないかと思い、その際エヴァはどうするか聞いてみようと思い戻っている最中である。

ふーむ、このまま暗くても鬱陶しいだけだな…よし、他のことで紛らわらそう

「アーミル、城まで競争だ。はいスタート！」

「え？」

いきなりの提案に？を浮かべるアーミルを後目にあっという間に走り出して見えなくなった黒。

ちなみに黒は自分の身体能力を確かめるのも兼ねて、こんなことをしたのだが、

おっ、速いぞ俺！？さすが逃げ足最強のメタルボディ、気分はまさにどこぞの音速針ネズミだ！

木の幹を足場にして垂直に走るといふ、完全に前では出せない技術とスピードに自分でも驚く。

そしてわずか数分で城が見える所まで到着し、急ブレーキをかけながら扉の前で止まった。

「……ちよつと大人気なかつたな…まあいいか」

ちよつと後悔しつつ中に入る黒。第三者がいればなんて酷い奴だと言われてただろう。

そして中央のホールに着いてみると

「もう！子供ですか副社長は！いきなり走り出して置いてけぼりなんて！」

何故か自分より早く着いて、プンスカ怒ってるアーミルと

「ふ、副社長さん！？こ、これは私の趣味じゃなくて…」

頭にフリフリのカチューシャとメイド服姿のキュートなエヴァがいた。

…状況が分からない。

紅茶とウーロン茶と緑茶はみんな同じ茶葉でできてるって驚き。(後書き)

主人公の容姿はデュララの黒のバンダナ巻いたバージョンのドタ
ちん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7826t/>

ずれた男の異世界観察

2011年7月21日08時23分発行